

## ヤマニ村再訪

——変容した農村社会、あるいは労働力市場形成——

友 杉 孝

### 一 はじめに

一九六七年より一〇年間、私はヤマニ村 (Muban Yamani) を折にふれて訪れ、中部タイ農村社会での人々の生活を見聞し、調査した。私が中部タイ農村社会のイメージをつくりあげたのも、この村での経験にもとづく。一〇年間の研究成果はモノグラフとして<sup>(1)</sup> 公刊し、さらにタイ農村社会についての論議でも引用<sup>(2)</sup> している。

しかし、現在、最後の訪問より一〇余年経過し、モノグラフ公刊後も一〇年が過ぎた。この間、農村社会の変容はすさまじく、かつて当然のこととしてあった事柄、事物は過去のもの (Khong Boran) となった。私の知り合った年寄りも亡くなった。同時に、新しいものがどこにでも入っている。たとえばテレビ。湾岸戦争のニュースにどの家族もテレビにかぶりつきで見ていたという。この戦争前、中東には何人かの人が出稼ぎに出ていた。新しい人も増え

た。かつての小学校入学前の児童が、現在は立派な労働者としてバンコクに移住する。確実に、一つの時代が終わったようだ。

このような急速な社会変容を目の当たりにして、私は二つのことに大きな関心をもつ。一つは、過ぎ去った時代を  
 実物経済 (Substantive Economy) として、一つの社会モデルを構想すること<sup>(3)</sup>。このモデルは現在の経済発展が支  
 払いつつある費用、意識的にせよ無意識的にせよ、を明らかにするであろう。たとえばテレビの普及は、隣人あるい  
 は家族関係をも疎遠にする傾向をもちうる。すなわち、経済発展による市場経済の一般化に対し、距離をおいて眺め  
 る視点を構築する。いいかえれば、私たちが自明のものとして、その中で暮らしている市場経済を異文化としてみる  
 構想力あるいはイマジネーションを獲得すること。市場経済の中で自明なことが必ずしも実物経済では自明ではない。  
 あるいは自明でなかったことを自明にするために支払う費用が明確にされる。市場経済での自然利用は、実物経済で  
 は自然破壊であることも起こりうるであろう。

もう一つは、何故このような短期間に決定的ともいえる社会変容が起こり得たかということ。農村社会外部、バン  
 コクからのインパクトの大きさはいうまでもない。しかしそれだけでは十分な説明にはなりえない。当然、外部から  
 のインパクトを社会変容の主要契機としてしまう農村社会内部の要因が探求されねばならない。すなわち、実物経済  
 の根幹であった稲作を可能とした経済蓄積が、改めて外部からのインパクトとの関連で検討されよう。農民労働力の  
 商品化の過程である。先の第一の関心と密接に関連しながら、第二の関心は労働力市場形成あるいは資本蓄積過程に  
 向かう。<sup>(4)</sup>

さらに、外部からのインパクトに対応する実物経済は生産だけにとどまらない。消費の記号化が実物経済を根底か

らくつがえし、市場経済への動きを決定的にしたからだ。すなわち、実物経済のもとでは、ものはその使用価値にしたがって消費された。しかし市場経済化の過程では、ものの象徴価値が強調され、使用価値とはまったく別の次元で一人歩きする。多種多様なものがファッションとして受け入れられ、所有者の社会的威信、地位、力を象徴する<sup>(5)</sup>。テレビのまたたく間もない普及、新しいデザインの衣服から化粧品、食べものにいたるまで、事例は数えきれない。重要なことは、ファッションを無視することが社会的に認められないことだ。テレビを購入しなければ、購入する力がない貧乏人 (Khon Chon) と見なされる。昔風の古い衣服を身につければ、変な人とされる。都市だけでなく農村社会においても、ファッションは個人の好みとしてより社会的力として働く。あるいは社会的力が個人の好みとして現象する。かくして、ファッションとしてのものを購入するために、賃労働は増加し、労働力の商品化は加速する。しかも、ものの象徴価値の強調、その一人歩きは隣人との差異をもので表現することに他ならない。多種多様なファッションの氾濫の中で、実物経済は決定的に変容してしまう。いまや幼友達に会うことができるのは、寺院での年中行事、たとえば旧暦新年の祭り、ソン克蘭 (Songkran) でしかなく、それすら必ずしも期待できない状況である。学校友達は皆それぞれ機会を求めて他所に出稼ぎにゆき、そこで労働者として生活しているからだ。

ヤマニ村を再訪し、亡くなった年寄りの話し振りを想い、私は感慨にふける。こうして、私はヤマニ村の社会変容を先の第二の関心から記述したいと考えた。しかし、時間的制約が強く、現在、まだ十分な調査は行われていない。したがって、小稿ではまず第二の関心にとって直接的に必要な限りで、実物経済を以前の調査にもとづいて記述し、ついで再訪の際の見聞を整理しておきたい。一つの予備調査報告である。労働力市場経済形成あるいは資本蓄積の問題に具体的にアプローチするためである。今後、これらの見聞を手がかりに、十分な調査を行い、村落社会の変容に

ついでに再考し、記述することを予定している。

## 二 伝統的な生業<sup>(6)</sup>

ヤマニ村は中部タイ、アングトング県ポートング郡オンカラック村 (Tambon) 第九区 (Muban) である。村はチャオプラヤー川分流のノーイ川 (Noi) 右岸に沿って帯状をなし、その北端はシングブリ県ターチャング郡トンスマ村に連なる。ノーイ川をはさむ村の対岸はシングブリ県ターチャング郡ピクングトング村 (旧トンスマ村の一部) である。すなわち村は、ちょうどアングトング県とシングブリ県の県境に位置する。しかし人々の日常生活では、行政上の境界は何の意味もなく、自由に往来している。

村はバンコクの北方、約一三〇キロに位置し、自動車で約二時間半、十分に日帰り可能な距離にある。しかし、このように便利になったのは自動車交通の急速な発達による。戦前、自動車交通が未発達の時代、中部タイの多くの土地がそうであったように、交通はほとんど水路に依っていた。バンコクとの間を定期船が運航していた。多くの舟着場を経由して、バンコクには一五時間もかかったという。自動車交通の発達、が事態をまったく一変させた。経済活動の速度が変わったのだ。私が最初にこの村を訪れた一九六七年当時、まだ沢山の人々を乗せた船が下流のバクハイに向かう光景が見られた。バンコクから雑貨を運んでくる船もあった。現在、これらの船もなくなった。すべて車の速度が優先する。しかし、まず船の速度に対応していた村の生業をスケッチしておこう。

村が立地するアングトング県、シングブリ県はチャオプラヤーデルタ上流部に位置する。このデルタ上流部の地形

の特徴は、河川に沿って長大な自然堤防が形成されていること。河川と河川の間、すなわち自然堤防と自然堤防の間は、当然、自然の凹地となる。後背湿地である。地形特徴は土地利用にはっきりと反映される。自然堤防は集落立地、後背湿地は稲作にである。この異なる土地利用の仕方は異なる二つの景観として表現され、両者が合体して一つの生活世界をつくる。

自然堤防に立地する集落を構成する家屋は、ほとんど川に面して建てられ、高床式である。かつて川が主要な交通路であったからだ。川に沿って、集落は自ら連綿と带状に続く。毎年、増水期の氾濫は床下を通して後背湿地に向かった。氾濫水がもたらす土砂は川近くが砂、遠くが粘土であるから、集落周辺の土壌は砂まじりで、蔬菜栽培に適し、果樹にもよい。雑木もよく繁る。かくして、高床式家屋が川に面して不規則に並び、家屋と家屋との間、あちこちに自家消費用蔬菜の小さな菜園の景観がつけられる。バナナ、パイナップルその他の果樹もごく無造作に植えられる。家屋の背後では、雑木がてんでに背丈を伸ばしてよい日陰になり、燃料の補給にもなる。雑木の向こう側は水田。集落に近い、あるいは高みに立地する水田は特徴的な景観を見せる。すなわち、水田一筆ごとを畦畔で区切り、水を保持する工夫がこらされる。畦畔にはところどころ椰子その他雑木が茂り、烈しい太陽の直射をさえぎって、水田の中に陰をつくる。ときに農民が一休みする。蟻塚の成長も目立つ。

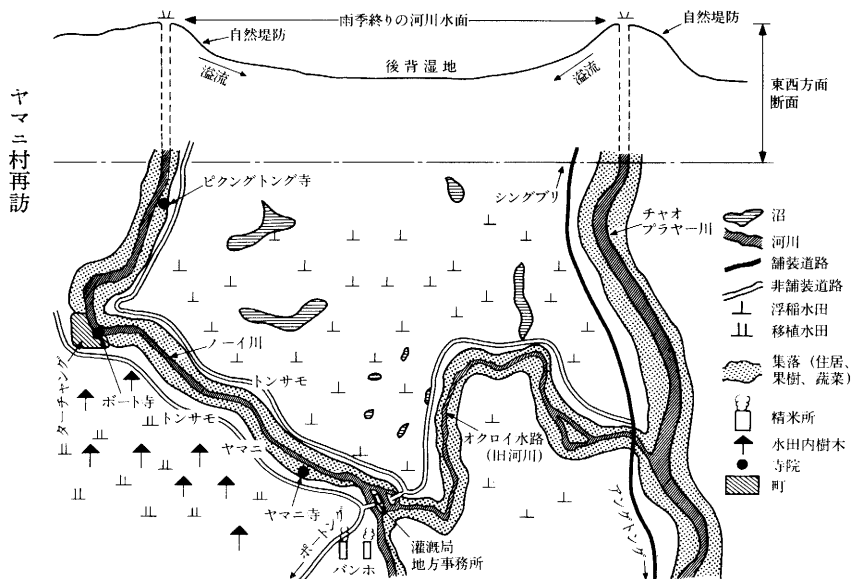
後背湿地では景観はまったく一変する。見渡す限り草が生える原野だ。集落はいうまでもなく、高く伸びる樹木もまったくない。はるか彼方、小さく見える樹木の切れ間ない列は、向こうの蛇行する河川がつくる自然堤防上の雑木林。あの木々の間に家屋が点在し、集落を形成しているはず。ここから向こうの集落に行く道路はなく、遠く水路を迂回して、何時間もかけねばならぬ。雨季と乾季の景観の相違も際立つ。雨季は氾濫水をたたえる巨大な水がめとな

る。下流に向かう勾配がごく緩やかであるため、河川から溢れる水は容易に滞留してしまふ。この水がめの中で浮稲 (Khao Ni Nam, Khao = 稲, Ni = 逃げる, Nam = 水) が育つ。滞留する氾濫水の水面上昇に応じて、稲も穂先を伸ばしてゆく。草丈二メートルを越す稲が栽培されているのだ。氾濫水は自然の肥料をもたすから、稲作の収量も毎年ほぼ変わらない。後背湿地の土地利用は浮稲によつてのみ可能であり、稲作以外の土地利用はほとんど不可能であつた。雨季が過ぎ、さしもの巨大な水がめも干上がると刈り取り、刈り取り後、ところどころの水溜まりに自然と集まる魚を捕る。さらに、集落近くに土盛りして、小さな池を築いて魚を捕える。魚は好まれ、多様に調理される。干物あるいは燻製にもなる。乾季、水がなくなつてしまえば、後背湿地は強烈な太陽のもつで、ひび割れた粘土の原。しぶとい雑草が辛うじて生きのびる。雨季が再び来るまで、かちかちの固結した大地に変わる。

以上にみたデルタ上流部の自然堤防と後背湿地の景觀一般は、そのままヤマニ村の景觀でもある。すなわち、ヤマニ村とトンサモ村はノイ川右岸自然堤防上に、ピクングトング村は左岸自然堤防上にそれぞれ立地する。しかし、デルタ上流部が西から東に緩やかに傾くことから、ノイ川右岸と左岸ではある程度相違する景觀を示す。一般的特徴のもつでの地域差といつてよい。すなわち、右岸では集落の背後に畦畔で区切られた水田がずっと拡がり、ノイ川から数キロ離れたコークプサ辺りでやつと低地となる。立木がまったく見られない後背湿地を特徴づける景觀。この低地は、すぐにノイ川西の旧河川乱流跡の自然堤防の高まりに連なる。他方、ノイ川左岸では集落の背後はすぐに低地となり、ノイ川の東を流れるチャオプラー川にいたる広い後背湿地が展開する。チャオプラー川の東はさらに広大な後背湿地。この右岸と左岸の地形的あるいは景觀の相違が集落の歴史に大きく関与してきた。

戦前、ノイ川右岸では現在よりずっと林が多かつた。水不足で水田を開けなかつたのだ。自然の凹地で水が溜ま

# ヤマニ村とその周辺



り易い土地が水田に利用され、他は雑木林であった。したがって、稲作のほかに水牛飼育、行商、魚捕り、賃働きなど、雑業が広く行われていた。たとえば行商。稲作をおもな生業としながら、女性が市場に行商に出た。家屋の周辺あるいは近くの人から蔬菜を集め、舟でポートング、シングブリの市場に行き、商った。小さな乳飲み子を抱え、舟を漕いだ。道路はなく、舟のエンジンもなかった時代。八キロのポートングは一日がかり、二九キロのシングブリは前日の夜から出かけた。市場で手持ちの蔬菜を商った後、干魚、塩魚を購入して、パングラチヤン市場で売った。水牛、牛の群を北部地方に連れてゆき、帰りに材木を運んでくる人もいた。土地なし農民は隣近所の手助けを済ませた後、ノイ川下流のバクハイに賃稼ぎに行った。バクハイには最大規模の後背湿地が拡がり、広大な水田の刈り取りはもっぱら出稼ぎ労働者にとよった。舟着場わきの市場は出稼ぎ人で溢れ、労働力を求める地元農民と賃金などを交渉した。出稼ぎ労働

者は次々と地元農民の間を渡り歩き、二ヶ月ほど過ごした。

一九五〇年代に始まる大チャオプラー計画はノイー川の水利事情をまったく一変させた。チャオプラー川の水位調節に対応して、ノイー川でも四ヶ所に水門を建設した。水門で水位を上げ、新たに建設した用水路に水を流した。この結果、これまで雑木林として放置されていた土地がすぐに水田に変わった。しかも安定した水供給により、安定した水田である。逆に、ノイー川左岸の水田は不安定さをいくらか増すことになる。左岸ではもっぱら、ノイー川の自然氾濫により稲作が行われてきたからだ。すなわち、後背湿地、巨大な水がめに徐々に水が溜まり、浮稲が穂先を伸ばした。当然、年による氾濫の時期、氾濫水の量の変動はあり、収量の不安定性は避けられなかった。しかしながら、不安定な降雨に比べ氾濫水はずっと安定的な水源ではあった。いいかえれば天水田より後背湿地の水田の方が、ずっと安定した収量を期待できたのだ。したがって、ノイー川右岸に対して、左岸は安定した穀倉でありえた。ところが、大チャオプラー計画にもとづく水位調節は、当然、ノイー川左岸の氾濫の状況を変えてしまう。自然氾濫に人工がくわったからである。自然氾濫に対応して、長い間の経験から選別されていた稲の品種は必ずしも新しい氾濫の状況に適応するとは限らない。たとえば、氾濫の時期がこれまでとずれるとか、あるいは氾濫水が一時にどつとくることも起こりうるであろう。かくして、ノイー川右岸、左岸の水利条件は歴史的に変わり、水利の変化に対応して稲作も動態的に変化したのである。

大チャオプラー計画がもたらしたもう一つの大きな変化は、農民の賃労働者化を促進したこと。ヤマニ村南部に灌漑局事務所が設置され、水門も設けられた。水門のすぐ上手から幹線水路がノイー川右岸に建設された。何軒もの家屋とその周辺地が強制立ち退きとなり、土地一ライ六〇〇バーツ、立木一本一〇バーツの補償金が支給された。こ



の新たな水利建設事業に伴って、突然、大きな労働需要が生まれた。一部は外部から移住してきて、村の外れにバラックを建て、居住した。一部は村とその周辺から応じた。用水路建設が終わった後も、施設の維持管理に一定度の労働力は必要であった。用水路の見廻り、補修、雑草除去など。事務所の守衛も村人の働き口となった。先に見たように、ヤマニ村の農民は稲作を主要な生業としながらも、多様な雑業で生計を立てていた。少し強調してみれば、稲作も雑業の一つとみなしてよいほど、農民と特定の生業、さらには土地との関係は流動的であった。一般的に、チャオプラーデルタでは農民は水を求めて移動したとさえいわれる。水がなければ稲作はおろか、生活も困難となるからである。したがって、大きな洪水で河川の流路が変われば、農民も集落も移動してしまう。米の商品化以前、土地が稀少性をもたなかった時代においては、水が農民の居住を規定していたのだ。いいかえれば、農民と特定の土地との結びつきは必ずしも強くなかった。移動性を強くもっていた。灌漑局事務所設置を中心とする水利事業の展開において、農民の賃労働者化は急速に進んだが、しかし大きな社会的軋轢は起こらなかった。五〇年代以降の水利事業による賃労働も、伝統的な雑業の延長として位置づけられたからだ。農業からその他の雑業への移行も、伝統的な移動の一つのバリエーションでしかない。伝統的雑業にみられた人間関係、たとえばパトロン・クライアント関係に貨幣勘定にもとづく合理性が重なることになる。

ノイ川水利事業の展開で、水供給が安定し、ヤマニ村とその周辺の稲作も安定し、新たに土地生産性の増大を目指す動きすらでてきた。デルタ稲作にとって歴史的といってよい動きだ。六〇年代、タイ社会全体の市場経済化が急速に進むことに対応する。そこで大きく変化した現在の稲作を明確にするために、まず伝統的稲作の最終期に相当する一九六〇年代を農事歴からみておこう。

稲作は降雨の到来とともに始まる。四月、年間を通して最も暑い時期、灼熱の太陽で焼かれた粘土質の土地は固結し、ひび割れて、一切の耕作を受け付けない様相を見せているが、五月中旬の南西モンスーンが水をもたらす。水が土地に浸潤し、土地は再び生物の棲む場となる。耕起も可能となる。水牛に犁をつけ、まず土地を荒起しする。ついでもう一度、犁をかけ、土地を細かく碎く。この後、種子を蒔く。一ライ(0.16ha)当たり三タンク(一タンク二〇リットル)見当。種子を蒔いた後、覆土。種子はこの後の雨で発芽し、育つ。もし降雨がなければ種子は枯死してしまう。したがって、その年その年の雨の降り方に十分に注意して、農民は種子を蒔かねばならない。耕起から種蒔き後の覆土まで、農作業は家族と水牛で行われる。水牛の労働力なしには農作業はほとんど不可能。水牛には人間と同様に魂(Khuan)が宿るとされ、大切に扱われた。かつて最も重要な動産でもあり、水牛泥棒が最も警戒された。

種蒔き、覆土後、特別の作業はない。適当な降雨を願うだけ。水田に雑草が繁茂しても放っておく。水牛の飼料に雑草刈りをすることはある。田の草取りではなく、草刈りである。施肥はない。土地の肥沃度は氾濫水により恒常的に保たれる。氾濫による湛水を前提とする限り、人工肥料は使えない。一一月末から二月始めにかけて、刈り取り期。集落に近い、高い土地では早稲が、集落から遠い、低い土地では晩稲が経験的に選択される。したがって、刈り取り労働のピークも緩和される。集落に近いところから始まり、遠くに及ぶ。約二ヶ月かかる。しかし、刈り取りを家族労働だけで済ませることは困難であり、賃労働にも頼った。農民は知り合いの幹旋人(Nga Ng Kuek)に頼み、必要な刈り取り人を集めた。刈り取り労働は日給でなく、一ライ当たりいくらかという請負制。幹旋人には顔見知りの多い人は誰でもなれた。六〇年代、すでに農民間の相互扶助による刈り取りはなくなっていた。かつては稲の成熟期のずれを利用して、農民は互いに他人の水田で刈り取りした。すなわち、他人の水田で働く代償に同じくその人に自分の

水田で刈り取りしてもらふ。労働力の等量交換であつた。働きに來てもらつた人々に農民は夕食を供した。共食は賑やかな雰囲氣の中で、人々の社会的結びつきを強めた。このような労働慣行をロングケーク (Long Khaek) あるいはアウレング (Au Raeng) と云つた。アウレングは刈り取りに限らず、家屋建築、屋根ふきかえなど多くの機會で行われた。相互性 (Reciprocity) にもとづく社会統合であつたのだ。しかし、六〇年代は、食事の接待が煩わしいという事で、人々はアウレングをまつたく止めていた。しかし記憶にはよく残っており、昨日のこのように話した。賃金請負制がずっと手軽で便利であるという。必要な労働力もごく容易に調達できた。アウレングから賃金請負制への移行は、実物経済から市場経済への決定的な方向づけであつた。以後、この方向性はますます勢いを加速してゆく。市場経済への方向性は一九六七年当時のヤマニ村の職業構成、土地所有状況からもみてとれる。すなわち、全世帯五四の中、農業は兼業も含めて三一世帯であるのに対して、賃労働は一六世帯にもなる。土地所有においては、二八農家の中、自作農は一五世帯、自作農五世帯、小作農八世帯。全世帯に対する賃労働で生計を立てる世帯の割合は高く、逆に、自作農の比率は低い。全体としてみれば、稲作が生計の基本であるものの、賃労働が生計の維持に大きく寄与している。しかし、このような賃労働に多く依存する、あるいは自作農の低い割合は、必ずしも市場経済の展開によつてではない。むしろ、逆に、市場経済の展開を容易にした条件として機能した。先に見たように、かつてヤマニ村は水利条件が良くなく、多様な雑業に多く依存していた。市場経済のもとで、多様な雑業は賃労働に変わった。新たな土地獲得が困難であつたからだ。

ヤマニ村の稲作を農事暦から振り返つてみた。一年を単位とする自然環境の周期的な繰返しと、大変よく対応している。もう一つ興味あることは、大切な年中行事との対応。例えば、旧正月の祭り、ソンクラーンは四月一三日。

年間で最も楽しい祭りで、人々は一年の幸せを願う。農耕作業が始まる直前の時期である。安居入り (Khaun Phansa) は陰暦八月下弦第一日、この日までに満二〇歳になっている男子は出家して仏門に入る。安居入りは種子蒔き、覆土が終わり、発芽した稲の順調な成長を待つ時期に対応する。九月下旬には大本生経聴聞 (Kanthet Maha Chat)。仏陀前生を物語る大本生経の最終部分、プラベートサンドン (Phra Watsandon) 王子の受難物語が語られる。人々は王子の純粹無垢の布施行に感銘し、涙する。仏教の真髓に触れた想いを抱く。水田に湛水し、稲の成長を待つだけで、とくにこれという農作業のない時期。陰暦十一月下弦第一日から十二月満月の日までカティナ (Kathina) の時で、寺院を訪れ、僧侶に衣をおくる。功德を積む大切な仏教儀礼である。カティナのすぐ後、陰暦十二月満月の日は灯籠流し (Loi Krathong)。夜、バナナの葉でしつらえた容器に蓮の花、ローソクをのせ、点火して川に流す。人々に大変親しまれている行事である。カティナ、灯籠流しは雨季が終わり、乾季が始まった時期。まだ河川の水面は高い。しかし、すぐに刈り取りが開始される。これまでみたように、重要な年中行事はすべて農作業がない時期に行われる。いいかえれば、農民の生活にとって、農作業と年中行事が一つのまとまったセットとしてあり、両者が補完的に合体して一つの生活世界を形成したのだ。すなわち、実物経済は自然環境を手段合理的に利用しながら、なお自然環境の中に埋もれ、コスモロジー、さらには遊びと不可分に結びついていた。

### 三 社会変容の始まり<sup>(7)</sup>

一九六七年、初めてヤマニ村を訪れた時には想像もできなかった変化が、一九七五年には容易にみられるようにな

った。この変化は現在にも及び、村落社会と人々の生活を一変させてしまう。まず一九七五年当時の新しい動きをみておこう。新しい変化は生産活動においても消費生活においても目覚ましい。生産活動からみてゆこう。

大チャオプラー計画の完成により、これまで雑木林として放置されていた土地が水田化したことはすでにふれたが、七五年には土地利用がさらに高度化する。幹線水路に近い水田で二期作が普及し始めたのだ。自然環境の周期的変化にしたがって、稲作は年一回と決まっていたことが克服された。国際的食糧危機による米価高騰にくわえて、技術的には灌漑水利、化学肥料、新品種、農業機械の諸要因が重なって機能し、この稲作の歴史的展開を可能とした。簡単に乾季作の農事暦をみよう。二月、北東モンスーンが卓越して、まったくといってよいほど降雨はないが、水路に接して苗代が用意される。三月に耕起。揚水機で水を水路から水田に入れる。四月に田植え。これまでの直播から田植えへの移行で、種子は政府推薦の新品種、農業試験場の所在地名からスパンと称される。七月、刈り取り。四月月たらずで収穫でき、在来種に比較してずっと成育期間が短い。しかも新品種は IRRI（国際稲作研究所）の高収量品種と在来種の交配によるから、収量が高い。一ライ当たり六〇～七〇タングで、在来種の二倍に相当。いうまでもなく、化学肥料が不可欠である。灌漑用水システムの整備が化学肥料の使用を可能としたのだ。刈り取りが終われば、すぐ八月で、雨季作に入る。耕起の開始。

このような二期作の導入は、当然、多くの技術革新をともしなう。高収量新品種についてはすでにふれた。新品種によって、安定的に高収量が期待できるようになった。しかし、農民自身は新品種の米を自家消費用とはしない。すべて販売してしまう。味が良くないという。興味あることに、毎日の飯米は在来種の米をそのつど少量ずつ市場で購入するのだ。米の商品化が一〇〇パーセント実現し、ヤマニ村の実物経済が市場経済に決定的に移行しつつあることを

端的に示す。揚水機もまた重要な役割を果たす。二月の苗代づくりから四月の田植えにいたるまで、揚水機なしには農作業はほとんどできない。この期間、降雨は偶然的なにわか雨しかなく、雨量はほとんどないからである。乾季の水利利用は当然、水不足をもたらす。用水路に近い水田、遠い水田あるいは隣接する水田の間でも深刻な水争いを発生させる契機をはらむ。これまで水争いの報告はないが、水利利用の地域的調停を図る水利利用者組合 (Samakhom Phuchaim Chonphrathan) が支線用水路ごとに設立された。新品種、揚水機以上に目を見張る変化はトラクターの登場。年二回の稲作は農作業の画期的なスピード・アップでもある。これまでのように水牛による耕起ではまったく間に合わない。トラクター導入は必然である。当初、トラクターはチャオプラヤーデルタ東部のトゥモロコシ地帯に導入された。七〇年代に入り、トゥモロコシ地帯に接するロブリ県の水田でも使われ始めた。ロブリの水田は非常に広大な後背湿地に立地して、稲作ではあるが、畑作に非常に類似した耕作が行われている。ロブリの水田に導入されたトラクターはまたたく間もなく、デルタ各地に普及した。これまでの水牛に比較して、はるかに簡便であるからだ。しかも、まだ水不足で水牛では耕起できない土地でもトラクターは利用可能で、乾季の農作業に適する。ヤマニ村では七五年当時、水牛はすっかり姿を消し、どこの水田もトラクターで耕起されるようになった。乾季作も雨季作でもある。いうまでもなく、すべての耕作農家がトラクターを所有したのではない。三世帯だけが所有し、他の農家はすべて賃耕に頼った。トラクター農家も賃耕で稼ぎ、トラクター購入費を月賦で返済に努めた。ひと度トラクターが使われれば、トラクターによる作業の迅速性にくわえて、さらに大幅な農民労働の軽減を実現した。これまで耕起は最も辛い労働の一つであった。結果として、当然、水牛はごく短期間に、姿を消すことになった。水牛は農民とともに、耕起の労苦を共にし、家族にも似た感情で飼われた特別な家畜であった。水牛の世話の子供の仕事であった。子供達

は水牛の世話をしなから農作業を具体的に学び、成長したのだ。水牛からトラクターへの移行は稲作の歴史的展開を象徴する。こうして、耕起も賃労働化されて、稲作は刈り取りにいたるまですべて賃労働で行われることになった。米の完全な商品化についてはすでにみた。かくして、ヤマニ村の稲作は市場経済のメカニズムのもとで行われることになった。したがって、理論的には農作業の賃金は労働の限界生産性で規定され、地代は土地の限界生産性で決められる。実際、賃金は田植一〇〇バーツ／ライで、一ライは三日の仕事。一日当たり賃三三バーツとなる。他方、労働の限界生産性は一・六五タング。一タングの価格は二一バーツであるから、労働の限界生産性は三三バーツと計算できる。地代についても同様に計算できる。二期作の実現により、地代は一五〇バーツから二五〇バーツに上がった。土地の限界生産性は一二・三タング、価格は一タング二三バーツであるから、価格換算して土地の限界生産性は二八三バーツ。すなわち、個別事例では多少のばらつきはあっても、おおまかにみれば賃金も地代も、それぞれ労働力と土地の限界生産性で規定されているといえよう。<sup>(8)</sup> いかえれば、ヤマニ村の稲作はタイ社会全体を単位とする市場経済の枠組みの中に完全に取り込まれたのだ。

消費生活においても大きな変化が七〇年代にみられた。電線架設とモータリゼーションである。七五年、ヤマニ村に電線がはいり、電灯、電気製品の利用が可能となった。ただちに、ケロシン・ランプは蛍光灯に変わった。日没後の世界が一変するきっかけであった。ランプがあるとはいえ、夜は暗闇の世界で、恐るべき幽霊 (Phi) が跳梁していた。人々は身体の不調から不測の災難にいたるまで、多くの望ましくない、恐るべきことを幽霊の仕業としてきた。しかし暗闇が後退するにつれ、幽霊の領域も縮小してゆく。幽霊の力を制御するモーピー (Mo Phi, Mo = 医者) に頼るのではなく、積極的に病院を訪れるようになったのだ。蛍光灯について、各種電気製品が氾濫するようにならわ

れた。まず、テレビ。テレビの普及は裕福な家族に限られたが、しかし画期的な出来事であった。個別家族を直接的にタイ社会全体、さらに世界全体に結びつけてしまったからである。人々はテレビニュースを具体的なイメージをもって眺め入る。ドラマも音楽も人々を引き付けた。かくして、村もテレビ時代に入る。同時に、テレビは社会的威信をも顕示した。テレビを持たないことは、「テレビが買えないほど貧乏」を意味した。無理しても買わざるをえない社会的雰囲気がつくられた。すなわち、テレビにおいても流行は個人の好みを超えて、無言の強力な社会的強制力として機能した。冷蔵庫も目につくようになった。これまで客があれば、素焼きのかめの水を銀器に入れて差し出した。しかし冷蔵庫が素焼きのかめに替わった。たしかに、冷蔵庫は素焼きのかめよりよく冷えるが、同時に現代という時代あるいは最新をも象徴した。「素焼きのかめは後れた」であり、「冷蔵庫は進んだ」である。

モーターゼーシヨンの動きもすさまじい。さきにみたように、ヤマニ村は船運を主要な交通手段としていた。しかし五〇年代の灌漑事業により、水路わきに車が通れる道路ができあがった。水路建設にともなう土を盛りあげたのである。雨が降るとひどいぬかるみとなる。トラックが道路のあちこちに穴ぼこをあけ、注意して運転していても、不意に身体は上下あるいは左右に運動してしまふ。このような道路であっても、まさに画期的であった。ヤマニ村をタイ全土をおおう道路網の末端に取り込んだからである。アングトングとの間に定期バスが運行することになった。バスといってもトラックの荷台に縦長に座席を設けただけの車。ポートングとターチャングの間にもバスが走り、ヤマニ村にも客があればバスは停った。人の動きも貨物の動きも水運に比較できないほど迅速になり、水運は決定的に衰退した。このような水運から陸運への移行は、たとえば七五年当時のバイクの目覚ましい普及。バイクは悪路はいくまでもなく、畦畔から家屋の前庭までも走り廻る。しかも、これまでの自転車とは比較できない速さだ。ただちに汗



水流して自転車をごく苦勞は疎まれた。若者の間で流行となり、普及した。近くのターチャング市場、あるいはシングブリとアングトングを結ぶ舗装道路まで、バイクに客を乗せる貨稼ぎも出現した。バイクに比較すれば、自動車の普及は遅れている。しかし、すでに一世帯は中古の小型ライトバンを購入した。この車に品物を詰め込み、毎日どこかで開かれる定期市に出かける。かくして、生活のペースが車に合わせて再編成される状況が起こりつつあるのだ。

テレビがイメージのレベルでヤマニ村を世界に結びつけ、車は村をタイ社会全体の中に、より強固に取り入れた。かつての実物経済による村がもっていた、タイ社会の中での相対的自立性はまったく失われ、村の消費生活もまたタイ市場経済の中に吞み込まれたのだ。このような変化は人々の服装の中にもはっきり表現される。たしかに、一部の年寄りはいまだ伝統的な衣服を身につけているが、若い人々は都会風の現代的な身なりになっている。いうまでもなく、髪の毛はパーマで工夫をこらす。ターチャングあるいは他の市場のヘアサロンに行くのも便利になった。しかし興味あることに、今でも夕方くつろぐ時は、水浴びの後、昔風の腰布をまとう。腰布はバンコク近郊の工場製であるが、いまだ必需品。昔風の伝統的くつろぎ着と現代的身なりとの共存というより、むしろ伝統的くつろぎ着も現代的衣服の一部に取り込まれてしまったとするべきであろう。すなわち、市場経済の深化にともない衣服の体系も変わった。腰布も近代的くつろぎ着として、現代の衣服体系の一部を構成しているのだ。しかし、いうまでもなく、腰布をくつろぎ着として使用する仕方は伝統にもとづく。

テレビその他電気製品の普及、モーターゼーションの急激な展開、衣服の都会風あるいは近代化についてみた。ヤマニ村において市場経済化は消費生活のさまざまな様相において急速に、確実に展開した。興味あることに、七〇年代、子供の数が急に減少した。これまで一家族当たり六、八人が普通であった。しかし七五年当時、子供の数は多く

て四人となった。子供の数が多くと育てるのが大変という。いうまでもなく、政策的強制があったのでは決してない。生産活動も消費生活も市場経済化する過程で、人々が生活の必要から産児制限を行った結果である。先に見た伝統的稲作においては家族労働力が大きな生産要素であった。しかし稲作農法の変化が、多くの家族労働力を必要としたことも大きい。

#### 四 変容した村落社会

一九九一年七月、私はヤマニ村を再訪した。アングトングからシングブリに向かう旧道を行く。道路わきに並木が茂り、気持ちよい陰をつくる。並木のすぐ向こうは集落である。近年建設のアジア高速道路が並木も集落もない、どこまでも拡がる水田のただ中を突っ切る景観とは対照的。旧道はチャオプラー川右岸の自然堤防上を走る。チャイヨー(Chaiyo)に近づく、集落の中から一際高いチャイヨー寺の本堂が望まれる。名高い寺院で、毎年二回、この境内で市がたつ。周辺農村から人々が集まり、売り買いあるいはフォークドラマの催しを楽しむ。ヤマニ村からもやってくる。旧道から側道に入る。側道はノイ川旧河道の自然堤防上にある。湾曲する道路から、広々とした水田の向こう側に金色に輝く大仏が見えてくる。有名なピクングトング寺の大仏だ。この寺院の住職、ルアング・ポーペー師は高德で、神通力をも兼ね備えた僧侶として大変な声望を集めている。師の肖像を鑄造した御守りを身につけていれば、ピストルの弾丸も身体を貫通しないと、交通事故を免れる、と人々は信じる。これまで膨大な量の御守りが販売され、あるいは師を招いて法要が営まれた。集まった浄財で大仏を建立し、その周囲を公園にした。現在、観

光コースにも入っていて、公園に何台ものバスを見かける。寺院が所在するトンサモ村の一部がピクングトング村に改名したことはすでにみた。僧侶の卓越したカリスマ性が村名を変えさせ、さらに興味あることに、現代の大切な観光資源になっている。タイ社会にあって社会統合の最も重要な契機であったカリスマ性が、社会の市場経済化にどのように機能するかを示す一事例であらう。

ピクングトング寺の金色に輝く大仏を遙かに望見しながら、何気なく並木の陰で覆われた道路を眺める。並木が切れる、日当たりのよい所で、道路の片側にずっと粃を払っている光景に気づく。人々が忙しそうに車から粃を出し、道路に払ってゆく。この時期に粃を乾燥させるとは何であろうかと不審に思う。記憶では、たしかに、この辺りは後背湿地に連なり、稲作は直播で浮稲であったはずだ。気づいてみると、水田は刈り取り直後の状態。本来ならば、直播が終わり、降雨に頼って稲の自然の成長を待っているはずである。この稲作の状況がよくわからないまま、ピクングトング寺の手前約三キロを左折してヤマニ灌漑局事務所に着く。

一九六七年から一〇年間、私はここを調査ベースとして近くの村を繰り返し歩いた。当時親しくしていただいた所長はすでに亡くなったが、知り合った人々は今もここに勤務していて、再会を喜んでくれた。早速、先ほど見た道路上の光景と私の疑問について話してみた。私の疑問は明確に解答された。すなわち、農法の画期的な、かつて想像もできなかった変化が起こったのだ。それまで雨季の降水とそれによる氾濫水で稲作は行われていた。しかし、現在は、乾季、灌漑局が制御し供給する灌漑用水によってのみ稲作を行う。雨季作はまったく放棄したという。乾季作は用水が制御されているから化学肥料の有効な使用が可能である。他方、雨季作は自然の氾濫水であるから化学肥料は使えない。くわえて、急激に氾濫する場合、浮稲でも水の勢いあるいは急な水面上昇に耐えられず、大きな減収となる。

稲作に安定した、高収量を求める場合、もはや乾季作が雨季作に対して決定的に有利であることが明らかになったという。後背湿地の土地利用は雨季の稲作、浮稲しかない、とするこれまでの常識が過去のものとなった。市場経済が一般化する過程で、稲作もまた決定的に変化したのだ。この稲作の変化をより具体的に知るために、灌漑局の知人は近くの農民の家に私を案内してくれた。ピクングトング村の村長である。ヤマニ村の生まれで、前ヤマニ村村長の甥。村長は農事暦にしたがって、ノイ川左岸の新しい稲作を説明してくれた。

三月、トラクターで耕起。すぐに種子を蒔く。一日だけ水に浸し、発芽し始めた種子を使う。種子が土壌に着くことをみて、水を水田に入れる。蒔種後、二五日目に第一回の化学肥料を施肥。四五日目に第二回の化学肥料を与える。こうして蒔種後一一〇日で収穫できる。六月から七月である。刈り取りが遅れば稲は乾燥し過ぎる。収量は平均して七〇タング／ライ、よい所では一〇〇タング／ライをも越える。以前の雨季作では三〇〜四〇タング／ライ。種子も在来種ではなく、政府試験場の高収量新品種を使う。新品種は化学肥料施与によく反応する。くわえて、雨季の氾濫水が運んでくる土砂の肥料効果もある。かくして、伝統的な雨季作はなくなり、乾季作だけが行われるようになった。六〜七月刈り取り後、水田は放置され、翌年三月の耕起を待つ。

新農法は安定した高収量を実現したが、同時に多くの農作業に貨幣支出をともなった。まずトラクター。多くの農民はトラクターを所有せず、すべて賃耕に頼る。二〇〇バーツ／ライの料金。水牛による耕起はまったくない。蒔種を賃労働によれば一五バーツ／ライ。化学肥料はすべて購入。ターチャングに所在する農業協同組合での信用購買である。施肥を賃労働に頼れば一五バーツ／ライ。刈り取り後、化学肥料代金を清算。農業協同組合はこの一〇年間に活動を拡大し、農民の生産活動を支える。この村長は組合役員も勤めたことがある。刈り取りはすべて賃労働でまか

なう。一六〇バーツ／ライの請負。労働者は地元あるいは少し離れたバングラチャンからグループをつくり、バイクでくる。刈り取った稲を束ねる作業は一束が一バーツ、束ねた稲束を車まで運ぶ作業は一束が三バーツ。脱穀も機械で行い、そのまま精米所に運んでしまう。結局、農民は自ら労働せず、作業を指示し監督するだけで稲作を行う。こうして収穫された米はすべて販売され、自家消費用をまったく残さない。種籾も残さない。種子はすべて翌年購入するのだ。高収量品種は味がよくなく、毎日の飯米はそのつど近くの市あるいは市場で買う。米の販売先は価格次第で、農業協同組合あるいは精米所に渡される。これら費用のほかに、小作人は小作料四〇〇〜五〇〇バーツ／ライを支払う。もし病害虫その他不可避の事情により不作の場合、小作料は損害の大きさに応じて減免される。

ノイ川右岸のヤマニ村の水田でも、同様の変化が起きていた。すでに七五年当時、二期作が導入されて、乾季稲作が行われていたことはすでにみた。しかし当時は田植えを行っていた。現在、田植えはまったく見られない。ノイ川左岸と同じく、乾季作も雨季作もすべて発芽した種子の直播に変わった。理由は田植えの賃金が高つくためである。田植えを直播に変えれば、それだけ稲作経費は軽減される。ノイ川右岸においても、稲作はすべて賃労働でなされる。しかも労働力はつねに不足の状態。村の多くの若者は男女ともにバンコクその他に稼ぎにゆき、あるいは他出してしまったからである。村に残った人も朝早く五時四五分、村道とバス道の交差点にくる車でアユタヤ県の工場に行き、夕方五時近くに同じく車で帰ってくる。新設工場が労働力を必死に集めているのだ。ノイ川右岸のもう一つの問題は深刻な水不足。灌漑局の給水能力ではとうてい十分な水需要に応じられない。結局、地域別に隔年別に給水されることになった。給水のない年は、乾季作は休むしかない。あるいはトウモロコシ、青豆などを部分的につくる。しかし稲作収量は画期的に増大していて、水が供給されれば、乾季作八〇タング／ライ、雨季作六〇タング／

ライとれ、七五年当時の倍増である。

稲作の画期的変化は村落社会変容の一側面ではなかった。新しい賃労働の増加にも目を見張る。造花づくりだ。村の中であちらの家でもこちらの家でも作っている。高床家屋の床下が仕事場。村の中を歩いていて、始めのうちは何を作っているのかまったくわからない。ある仕事場では中国産の紙を縫って細い棒を作る。他の仕事場では針金を一定の長さにする。別の仕事場では針金の先に小さな紙の塊をつける。他では同じく一寸大きいふくらみのある発泡スチロールをつける。蓮の花になるのであろう。針金にトイレットペーパーを巻きつけ、その上に緑色の紙を巻いている人もいる。完成品を作っている仕事場はどこにもない。すべて部品ばかり。村に居住する何人かの請負人がバンコクの会社から注文をとる。部品の仕様はそのつど、会社が指定する。請負人は材料をすべて購入し、村の人々に出来高払いで仕事を出す。一日、六〇〜一〇〇パーセント程度の賃金となる。請負人は出来上がったこれら部品を自分の車で会社へ運び、代金を受け取る。再び材料を購入して、村の人々に仕事を与える。条件の良い請負人には隣村の人でも少し離れた所からも仕事をもらいに来る。ヤマニ村の一人の請負人は土地なし農民であったが、現在は成功して車二台を所有し、村ではまだほとんどない電話まで利用している。興味あることに、ヤマニ村では材料は紙であるのに対して、ピクングトング村ではプラスチック。バンコクで仕上げる完成品は外国に輸出されるという。この造花づくりの下請けで、村の人々の賃労働はこれまでもまして増加した。時間があればこの仕事にとりかかる。つい先ほどまで寺院で供養していた人が、家に戻るやすぐに床下の日陰で仕事に励む。与えられた仕事、たとえば紙を縫って細い棒を作ることは他人と関係なくいつでも一人でできるから、小さな子供のいる母親にも可能である。かくして造花づくりはノイ川沿いの村々にまたたく間に普及した。いうまでもなく、日常生活での多くの現金支出が造花づ

くりによる賃金収入を必要としているのだ。

日常生活はすべて現金支出で営まれる。まず食費。米、野菜、魚、調味料、プロパンガスなど、すべて現金支出。忙しい時は、米はガス炊飯器で炊くが、おかずは出来合いのものをあれこれ買う。おかずもお菓子も市場、市で売っていて、小さなビニールの袋に入れてもらう。とても簡便。村ではカノムチン（米粉のソバに辛いカレーをかけた軽食）を専門的に作る家族もいる。バイクで灌漑局構内の水門わきに運び、毎日、四時過ぎに売る。カノムチンのかたわらで他の人はヤシミルク入りお菓子を売っている。水門の向こう側ではランブータン、ジャックフルーツ、フランク、パイナップルなど各種果物を皮をとり、あるいは小さく切って食べ易いように取り揃え、夕方、通りかかる人々に売る。大変簡単な買い物。村道とバス道との交差点には露店のソバ屋。昼前から夕方まで商って、村の人も通りがかりの人もよく食べる。村の中にもソバ屋ができた。昼御飯を自分で用意するのは面倒であり、ソバ屋を利用する方がずっと便利。かくして、一回ごとの支出はごく僅かでも、一日さらには一月と累積すれば、食費は相当な額に膨らむ。学校に通う子供がいれば一層である。

家屋に対する出費も大きい。いくつかの家は新たに改装、あるいは新築された。新しい家屋は伝統的な高床式ではなく、都市の家屋と同じく平床式。高床式家屋の、日陰で風通しのよい床下がもっていた多様な機能、たとえば近隣の人とお喋り、子供のお守り、家内仕事、物置などはなくなった。都市的なものは格好よいものであり、望ましいものでもあるのだ。床下を高くして氾濫水に備える高床式家屋から平床式家屋への変化は、一つの生活様式からもう一つの生活様式への移行も示唆する。家屋の中も変わった。まずどここの家にもカラーテレビがある。夜は国内外のニュースを見たり、映画、ドラマあるいはバラエティを楽しむ。テレビ購入は月賦が多い。一く二万バーツを月賦で二

年以内で返済する。裕福な人は即金で買う。月賦に比較して相当に安い。バンコクにいる子供から贈られる例もある。いまやテレビは生活必需品になったようだ。カセットラジオは別にして、ラジオの時代は過ぎ去った。ラジオからテレビへの移行は、ちょうど、自転車からバイクへの変化に対応するであろう。現在、ほとんどの家族はバイクを持ち、用事を済ます。自転車を漕ぐ人はほとんど見かけない。明らかにバイクは格段に便利であり、いまさら自転車に執着することはとても出来ない。バイクを月賦で購入し、その維持に多少の出費はやむをえない。バイクだけではなく、一部ではあるが自動車をも持つ。ある元教員は近くにはバイクで、遠くへは自動車を使う。週市で商う人は大型バンに一杯の商品を積んで出かける。村で自動車を所有することは、決して珍しいことではなくなったのだ。

このように日常生活のあらゆる面が貨幣支出で営まれる状況は産児制限に反映する。すなわち、以前は子供の数六人八人が普通であった。現在は多くて三人。産児制限の大きな理由は養育費、教育費がかかり過ぎることである。いくらでもなく、政府による産児制限を奨励する政策はある。村長の家の床下の壁に大きな産児制限のポスターが貼ってある。しかし決定的なことは、子供を多く持ちたくないとする人々の態度だ。産児制限については、近くの保健所で相談に応じる。産児制限の方法はピルと男性避妊手術が用いられるが、ピル使用の方が多いという。ヤマニ小学校では児童数が二〇〇名台から一〇〇名台に減少し、教師数も一三名から九名に減ったという。以前は考えられもしなかった状況。若者がバンコクその他に出てしまい、くわえて出産率も激減した。したがって、村の人口構成は中年と老年の人口比率が増加し、年寄り二人だけの家族も珍しくなくなった。七〇歳過ぎのある農民は、一六ライの水田をすべて賃労働でまかなう。しかし、二〇クイエ（一クイエン＝一〇〇タンク）を越える高収量をあげる。彼の子供六人はすべて他出し、独立した。なにか行事がある場合だけ実家に戻ってくる。別の農民は八〇歳近くで、水田はす



べて小作に出す。六人の子供はすべて独立し、灌漑局官舎の娘以外はすべてバンコクに住む。折々、この娘が両親の様子を見にバイクで来て、しばらく居て帰る。しかし、近くに住む老人同士が一緒になって何かをするということはない。大きな部屋の片隅にテレビはあるが、孫達の賑わう姿はない。

現在、ヤマニ村で進行中の急激な社会変容について記述してきた。この変容は前述七五年当時の動向が、さらに市場経済の方向に徹底的に推進されたことを示す。現在、人々は貨幣のからくりの中でしか生活できない。このような状況を端的に見せる指標として地価騰貴がある。ある農民は一〇年前に七ライを八千バーツで購入したが、現在この土地に対して一ライにつき一万二千バーツの話がある。しかし売る気持ちにはならないという。一万五千バーツの価値があるはずともいう。もはや人間の身体の動きの対象としての土地ではなく、貨幣の数字のからくりの対象としての土地が人々を圧倒するように迫る。稲作のための土地購入はほとんど不可能で、むしろ将来の地価値上がりを見越しての投機であろう。たしかに、人々は土地から分離したのだ。したがって、土地も労働も商品として現われ、経済活動において、人と人との間の社会関係は貨幣を媒介としてのみ成立する。稲作労働はほとんど賃労働に担われ、くわえて造花づくりがさらに労働力の商品化を徹底的に進めた。若者は労働者として他出した。すなわち、全国規模での労働力市場の形成であり、同時に資本蓄積過程でもある。歴大な商品化した労働力を基盤にして経済発展が実現した。興味あることに、バンコクその他に労働者として他出する人々は、多くの場合知り合いを頼りに仕事を求め、移住する。伝統的な稲作は人と人との知り合いのネットワークを基盤に成立していた。いいかえれば、様相はまったく異なるが、生産基盤となる労働力が社会的に編成されるパターンは同じなのだ。先に日常生活における貨幣支出についてみた。現在、日常生活は貨幣なしには不可能で、どんな機会をも逃すことなく利用して、貨幣所得を増やさねば

ならない。同時に逆のこともいえるであらう。すなわち、貨幣のために働いた代償として貨幣支出をする。いわば貨幣支出は労働に対する救済行為であり、商品は救済財に相当する。したがって、商品はもて本来の使用価値を超える象徴価値をもって人々を購買に誘う。ヤマニ村においても、ファッションは社会的必需品として機能しているのだ。

急激な社会変化を貨幣による社会関係の全面的な展開としてみた。この社会変化に巧みに適応できる人もいれば、失敗する人もいる。とくに病氣の際は苦しい状況に陥りやすい。身体の不調は病院、保健所で診てもらうが、いつも健康を取り戻すことができるとは限らない。むしろ慢性病の完治は本来的に困難であらう。しかも病氣治療費が大変。保健所、国立病院でも費用がかかるが、私立病院ではとても大変なことになる。このように貨幣では処理できない状況は決してまれなことではない。結局、神がかり (Khon Song Chau) にすることがにもなる。七五年当時、ヤマニ村の対岸、トンサモ村に神がかりがいて、多くの客を集めていた。女性シャーマンで、インドラ大王に憑かれるという。大王に憑かれると眼が輝き、表情が一変する。言葉も聞きとれなくなる。父親が客との間を取り次ぐ。死霊と交信し、あるいは病氣を起こす悪霊を身体から追い出すこともできた。多くの人がシャーマンの治療を受けた。何人もの人が夜をここで過ごし、床に横たわって、生薬の施与を受けた。現在、アングトングに引越していて、以前にも増して客を集めているという。貨幣によつては覆えない領域、いわば市場経済の割れ目がシャーマンの力で繕われる。したがって、シャーマンは非科学的として排除されるのではなく、むしろ市場経済の深化にともなつてより繁盛するのだ。シャーマンを媒介として、人々は貨幣の虚構性を超越し、人間存在の基盤である意識にくい自然、すなわち身体性に還帰するのであらう。

## 五 安居入りの日

今年（一九九一）、七月二十七日は安居入り（*Khau Phansa*）。この日から安居明けまで三ヶ月間、僧侶は寺院に籠って修業に専念する。古くからのしきたりが現在も厳しく守られているのだ。今年、僧侶を志す人は七月二十七日以前に得度式（*Uposob*）をあげ、出家するように日程を決める。たまたま私がヤマニ村を訪れていた時に、二人の若者が出家した。男子、満二〇歳に達すると出家することが慣習である。出家することで先祖、特に母親に功德をおくる。母親は自らは出家できないが、かわって息子が出家することで功德を積むことが可能となる。すなわち、出家は長い期間の養育に対する報恩の行為でもある。さらに社会的に、僧侶生活を経験することが男子にとって一人前の条件ともされ、出家以前の男子は未熟者（*Khon Dip*）と呼ばれた。寺院に入ることできっぱりと母親から隔離され、二二七条の戒律を守って生活する。もって生まれた自然の本能で生きる存在から、規則によって生活する人間へと再生。異性との交渉は最も厳しく避けられる。いいかえれば、伝統的に出家は最も重要な通過儀礼の一つだ。僧侶生活の期間はまったく個々の僧侶に任されており、安居期間の三ヶ月から何年にも及ぶ場合もある。還俗はいつでもできる。現在、普通は三ヶ月。中には仕事の都合上、三ヶ月未満で還俗する場合もある。かつては安居期間はちょうど稲の成育期間に対応していたから、農民は稲作に支障を与えることなく寺院に籠ることができた。現在、職業は多様化して、仕事によってはとても三ヶ月も仕事を休むことはできない。しかし寺院生活の期間はどうかであれ、出家生活を経験して一人前の人間となる。還俗後、適当な女性を求め、結婚して世帯主となる。

得度以前の存在をナーク (Nark) という。ナークは神話上の蛇。得度式の前日、ナークの志気を鼓舞する儀礼を行う。得度式の当日は朝八時頃に家を出る。家族、親戚に友達がくわわって行列をつくってヤマニ寺に向かう。人々は踊りながら賑やかに進む。酒びんをもって身振りしている人もいる。いつもは控えめな中年の女性が身体をくねらせて踊り、迫力をもって見る人に迫る。日常生活とは逆のことを演じているようだ。ナークは行列の最後尾で肩車に乗って進む。美しく飾った天蓋がナークの頭上に掲げられ、特別の存在であることを示す。ナークは剃髪し、白衣を身にまとう。踊りながらゆっくりと時間をかけて行列は進み、本堂まで来ると、時計廻りに三度廻る。三度廻った後、ナークは肩車から降り、本堂前の勝示石 (Bai Sema) に額づく。この後、小さな造花と一緒にコインを人々の中に入らなく。皆、競ってコインを奪い合うようにして求める。このコインを財布の中に入れておけば財布はいつも空にないという。すぐに僧侶になるという特別な存在による境界性が、コインの呪術的力として表現されているのだ。貨幣が貨幣として信じられることが、実践仏教を媒介していると示唆される。信じられない貨幣は単なる金属片、紙切れでしかない。経済活動の原点にある貨幣と仏教との見えない関係が、儀礼の時にのみ垣間見えることがある。華やかなお祭りの雰囲気はここまでであった。コインを懐に人々は家に帰ってしまった。家族とごく近い親戚が残って、すぐに始まる得度式に臨む。

得度式は先ほどの、猥雑とも見える行列とはまったく異なり、厳しい形式にしたがい、大変厳かな雰囲気で行われる。九時過ぎ、脇の入り口から二三名の僧侶が本堂に入る。本尊の大きな金色の仏像を背にして、導師 (Upacha) が着席し、左右に六名の僧侶がそれぞれ座る。今日の導師はヤマニ寺の住職。家族、親族は本堂正面入り口、末座にかたまる。ここには床の敷物もない。入り口の扉は閉ざされ、得度式が始まる。ナークは導師の前にひざまずく。導

師は型通りの審問をして、ナークが僧団 (Sangha) に入っていることを認める。ここでナークは白衣から僧侶の黄衣に変わる。鉄鉢を背にして、一度、正面入り口まで退き、再び導師の前に進む。導師は短い訓話を新参僧侶に与える。この後、僧侶全員が本尊にひざまずき、仏陀の教えを守り、精進することを唱和して得度式は終わる。約一時間の儀礼。息子はナークから僧侶になり、母親は息子を合掌の対象とする。異なる次元の存在となったのだ。新参僧侶は還俗後も得度式の導師を生涯の師として尊敬する。この得度式の式次第は、以前何回か参加する機会を得て見聞した式とまったく変わらない。変わったとすれば、新参僧侶の僧侶生活が短くなり、安居入り前にも還俗してしまうことである。実質的な僧侶としての修練をほとんど経験しない、まさに形式的出家である。形式的出家すらしない男子も増えている傾向にあるようだ。実物経済から市場経済への移行は、当然、出家行為の社会的コンテキストの変化でもある。市場経済の中で出家行為がどのような社会的意味を獲得するか、もししばらくの経験の積み重ねを必要とするであろう。得度式の後、新参僧侶の家族は僧侶全員を昼御飯に招待した。再び和やかな気楽な雰囲気になった。三台の車に分乗して、バス道路沿いの家に向かった。

住職の部屋で雑談する。正面に仏像と等身大の国王陛下の写真が掲げられる。テレビが二台あり、部屋はクーラーで涼しい。住職は一九六七年当時と同じ人物であるが、二〇年余りの歳月が住職に何かふくらとした感じを与えている。時間の経過とともに成熟し、自ら貫禄を身につけたのだ。村の人々はよく住職のもとに訪れる。住職は仏教指導者であるだけでなく、同時に生活上の様々な心配事の相談役でもある。住職は人々の話に耳を傾け、心の平静の大切さを説く。身体の不調の訴えには薬を与え、さらに必要に応じて病院で診てもらうことを勧める。住職に話をするごとと自体が人々の心の和らぎになっているようだ。住職の話題は幅広い。エイズの恐ろしさも語られた。新しいエイ

ズ治療薬が開発された、と報道されて喜んだ。しかし治療ではなく、延命にいくらか役立っただけと知って失望したと話す。日本のこともよく聞かれる。経済から仏教、日常生活まで話は広がる。一九六七年当時、交通不便な村も、今では世界の最も新しい情報に接する。

七月二十七日、早朝、ヤマニ寺に向かう。すでに寺院に調理した食物を布施し、帰路につく人々とすれちがいがながら寺院の講堂(Sala)に着く。講堂を見て驚いた。沢山の、ちょっと数えられないほどのバイクが講堂前にある。自転車は見当たらない。車も三台あった。講堂に入って、さらに驚いた。広い講堂が人で一杯。三〇〇名を越えるであろう。他出している多くの人々がこの日のために戻ってきたのだ。皆さっぱりとした身なりで、男も女も白のシャツあるいはブラウスが多い。近くに住む知り合い、親戚がかたまつて床に座っている。中央西側で供物一式を寺院委員会(Khanahan Wat)が販売する。まず人々は北側外れで僧侶の鉄鉢に御飯を入れる。サイバートという重要な積善行為で、鉄鉢は寺院の僧侶の数だけある。サイバートを済ませ、供物一式を購入してから、誰か知っている人が居る所を探して座る。いつもは見かけない若い人々が多く、小さな子供連れも多い。八時ちょうど、寺院の僧侶全員が講堂に入り、西側外れの七〇センチほど高い台座に上り、東に向いて座る。住職が向かつて一番左、仏像に接する位置を占める。すぐに僧侶に食事の接待。先ほどの鉄鉢の御飯、沢山のおかず、数多くの甘いものが給仕される。僧侶の食事が終わって、会衆一同が仏教徒であることを誓う唱和が始まる。皆、合掌し、厳肅な雰囲気。寺院委員会の一人がマイクでリードするが、これまで何回も数知れぬほど唱和してきたので、とてもリズムにのって美しく聞こえる。ついで僧侶の唱和が始まり、会衆一同は合掌して聞き入る。唱和が終わると住職が立ち上がり、講堂東外れで灌水を受ける。椅子に座り、前に差し出した掌に会衆が次々と灌水する。僧侶に備わる特別な力(Sakshi)によって、自分

と自分の家族の幸せを願う行為。灌水後、住職は元の場所に戻る。台座に並ぶ僧侶に人々は用意した供物一式を贈る。すでに亡い人に対する供養の行為。この後、再び唱和があり、僧侶一同が講堂を後にして儀礼は終わる。会衆も三々五々帰路につく。しかし、少なからずの人々が残る。僧侶に供された食物の残りを頂くのだ。なにしろ供された食物がとても沢山、残り物もまた十分にある。あちこちに円い座ができ、和やかな雰囲気のもとで食事が始まる。食事の後、一〇時半に予定された読経を聴聞する人だけが残る。残った人はほとんど年寄りで、数も少なく二〇名位であった。若い人は実家で寛いでいるのであろう。明日、日曜の午後にバンコクに帰るはず。しかし、バンコクその他で暮らす人々にとって、父母と父母が住む土地は一つのアイデンティフィケーションのよりどころとなっているようだ。いうまでもなく、父母の土地のイメージには寺院行事を中心とする実践仏教が大きな位置を占める。

読経聴聞まで年寄り達の話の話を聞く。子供達は他出し、独立して、年寄り二人で暮らしているが、それでも何かの場合は子供を頼りにしているという。同時に子供達も老父母をあてにもする。水田の価格が騰貴したからである。バンコクで多額の負債を負った息子を、水田売却の代金で救済した事例もあるという。興味あることに、農民が直接的に窮乏して土地を手放すのではなく、都市に他出した息子の債務を払うために土地を売るのだ。結果としては、土地をもたない農民と土地を買い集めた農民が出現する。ふと気づくと、一人の婦人が二〇バーツ紙幣と供物台にあるコインとの交換を頼んでいた。何故わざわざ供物台のコインとの交換を頼むのか、私は不審に思った。これから有難い読経を聴聞する雰囲気での貨幣交換が、どうも場違いに感じられたからである。理由はこうであった。先ほどの儀礼の際に、僧侶に捧げた供物台には僧侶の特別な力が乗り移っているという。したがって、この特別な力が無限であるように、所有する貨幣も尽きることがないという。すなわち、いつも財布の中のコインが絶えない。仏教の力の無限制性

が貨幣の無限性に重ね合わせられているのだ。しばらくすると、若い女が小さな不具の子を連れて物乞いに来た。一人の八〇歳も過ぎたと思われる老女がいくらかの貨幣を与え、仏陀の恵があるようにと物乞いに合掌した。現在、全く見られなくなった光景で、大変感動的であった。施しを与える人が受ける人に対して合掌する光景は逆説的だ。両者の間に仏陀の限らない恵みに対する深い信仰があつて、初めて成り立つ光景である。この光景は貨幣誕生の形而上学をも示唆する。すなわち、仏陀の恵みは無限であるから、あらゆるもの、どんな高価なものとも交換可能である。

実際、金持ちは来世の幸せを願つて、何の物質的対価を期待することなく、多額の喜捨を寺院に対してする。もし仏陀の恵みを特定のもので表徴すれば、このものはあらゆるものと交換可能であるはず。いいかえれば、特定のものを貨幣、あらゆるものとの交換可能性の表徴、として信ずることと仏陀の無限の恵みを信ずることが、形式論理的には同じである。いうまでもなく、形式論理的同型性が現実化するためには、具体的な歴史条件の展開を待たねばならない。しかし仏像の輝く金色と貨幣の金は見えないところで結びつく。<sup>(9)</sup>プロテスタンティズムとはまったく異なる仕方、逆説的ではあれ、仏教信仰も市場経済の展開を用意した。市場経済の原点に位置する貨幣の誕生を探ることは文化、むしろ異文化というべき市場経済を構想する大切な視点であろう。

読経聴聞はすぐに終わった。一人の僧侶が講堂に特別に設けられた読経台に上り、読経する。一同は合掌して聴聞し、額づく。読経聴聞後、一一時過ぎに再び食事。先ほどあました食物を集めて、皆で頂く。食事後、今日この講堂で夜を明かす人だけが残る。五戒を守り、来世を願つて寺院に籠り、僧侶と同じく昼御飯以後は明日まで食物をとらない。皆、年寄り。しかし、このようなごく少数の人の献身的奉仕で寺院の行事が滞りなく行われ、他出した若い人が戻ってくる場がつくられる。



1 Takashi Tomosugi, *A Structural Analysis of Thai Economic History*, Institute of Developing Economies, 1980.

2 友杉 孝、「タイ農村社会における市場の多義性」、『東洋文化』六三、一九八三。

3 一つの試みとして、著者は下記のエッセーを発表した。

Takashi Tomosugi, "The Reconstruction of a Substantive Economy in Rural Thailand", in *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*, Institute of Oriental Culture, 1991. このエッセーは上記註2の英訳であるが、英訳にあたって実物経済のモデルを構想する視点から、著者は相当に加筆した。

4 一社会の労働力市場形成過程は、その社会の実物経済の存続を可能とした経済蓄積のタイプの相違によりまったく異なる。したがって、水田に基礎をおいた日本の場合と、労働力の社会的編成に頼ったタイとを直接的に比較することは本来的に無理である。同様にヨーロッパの事例との比較も難しい。古くから個人主義が発達したイギリスの場合と、パトロン・クライエント関係が大きな役割を果たしてきたタイでは、労働力市場形成過程も異なるであろう。タイでは奴隷制が今世紀始めまで根強く存続していたことも考えるべきであろう。まず個別社会の実物経済を支えた経済蓄積を具体的に明らかにすることである。経済蓄積のタイプについては、上記註3のエッセーで論じた。

5 ファッションが商品の系譜の主流にあることを著者は論じた。

Takashi Tomosugi, "On the Genealogy of Commodities", in *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*, Institute of Oriental Culture, 1991.

6 「伝統的な生業」については、おもに下記による。

Tomosugi, *A Structural Analysis of Thai Economic History*, 1980, pp. 3-25.

7 「変容の始まり」については、おもに下記による。

Tomosugi, *A Structural Analysis of Thai Economic History*, 1980, pp. 40-46.

8 限界生産性についての議論は、下記による。

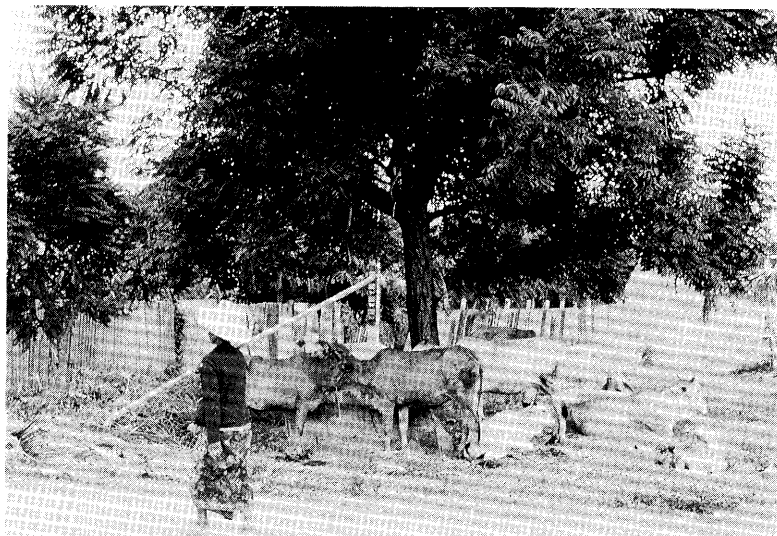
原洋之介・大塚勝夫、「中部タイ農村における稲作技術の変化と労働土地市場」、『総合農村開発基礎調査』、国際開発センター、一九七七、所収。なお、上記註7においても、原・大塚論文を引用。

9 仏教信仰と貨幣の間にある形式論理的同型性について、先に著者は論じた。

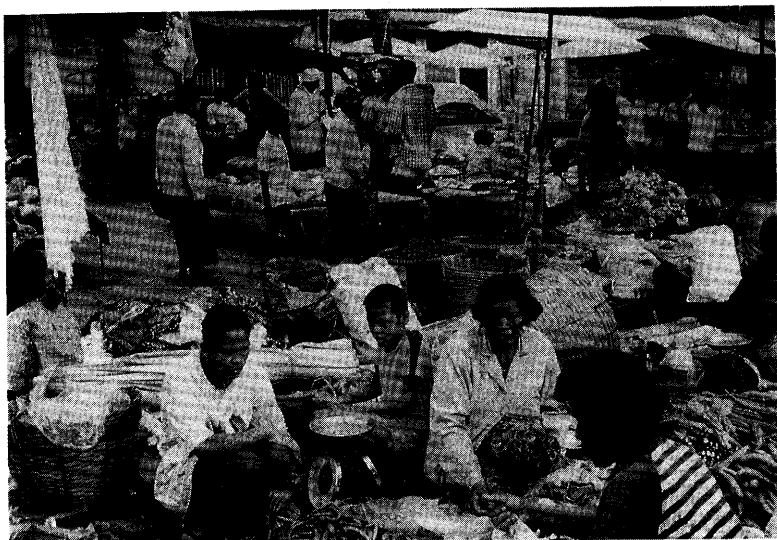
Takashi Tomosugi, "The Symbolic Value of Ancient and Primitive Monies", "The Reconstruction of a Substantive Economy in Rural Thailand", in *Rethinking the Substantive Economy in Southeast Asia*, Institute of Oriental Culture, 1991. 貨幣は phi, 超越的な力をもつ存在(精霊、幽霊、悪霊)の記号変換である。局地的な phi 信仰に根ざす貨幣が普遍性を獲得する過程において、普遍宗教としての仏教が介在した。



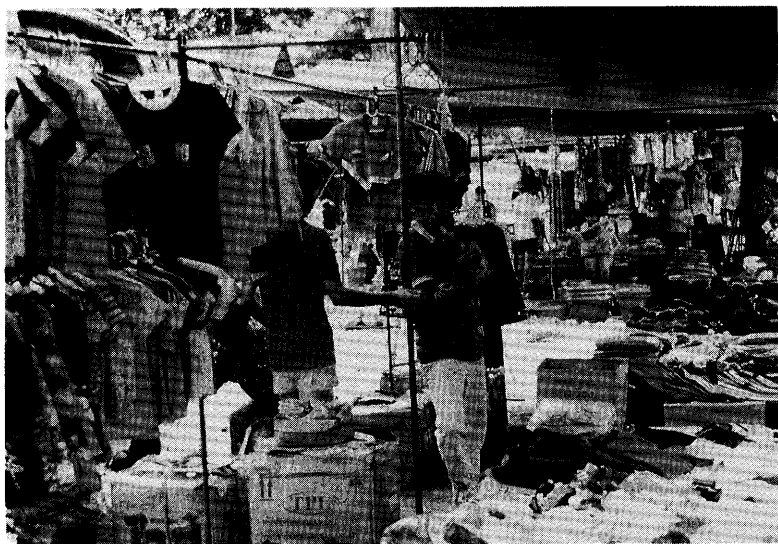
- (1) 粃を道路片側で乾燥し、精選して、すぐに精米所に運ぶ。  
すべて賃労働。



- (2) 雌牛を購入し、小牛を育てて販売。収益が良いとして、  
かつての豚に替わる。



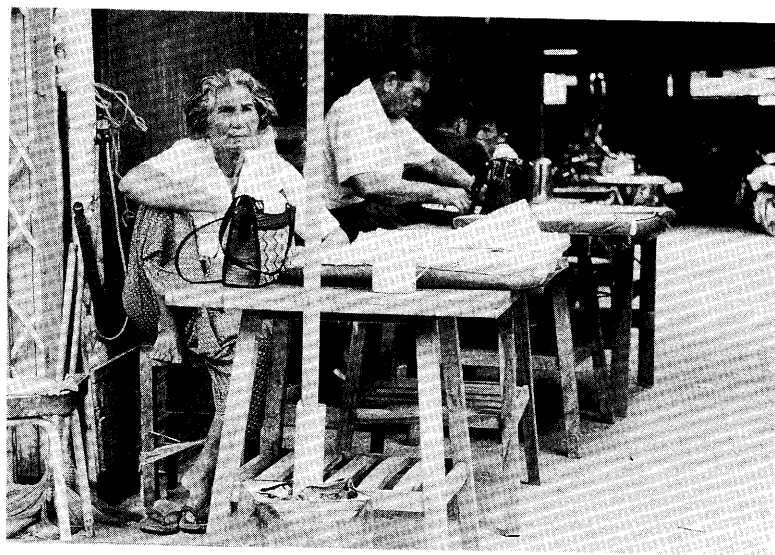
(3) ターチャング定期市(1) 朝8時頃から11時頃まで、  
ポート寺境内で開かれる。



(4) ターチャング定期市(2) 生鮮食料品、乾燥食品から衣料、  
雑貨までそろう。



(5) ターチャング定期市(3) 売買は経済取引であり、社会的コミュニケーション。



(6) ターチャング定期市(4) 市に接する、ターチャング市場の宝くじ売り。



(7) ターチャング定期市(5) 毎日、大きなバンで定期市を巡回して商う。



(8) ターチャング定期市(6) 午前中の商い後、午後は床下の日陰でゆっくり休む。



(9) カノムチン作り(1) 午前中は定期市で、午後4時過ぎは、水門わきで売る。



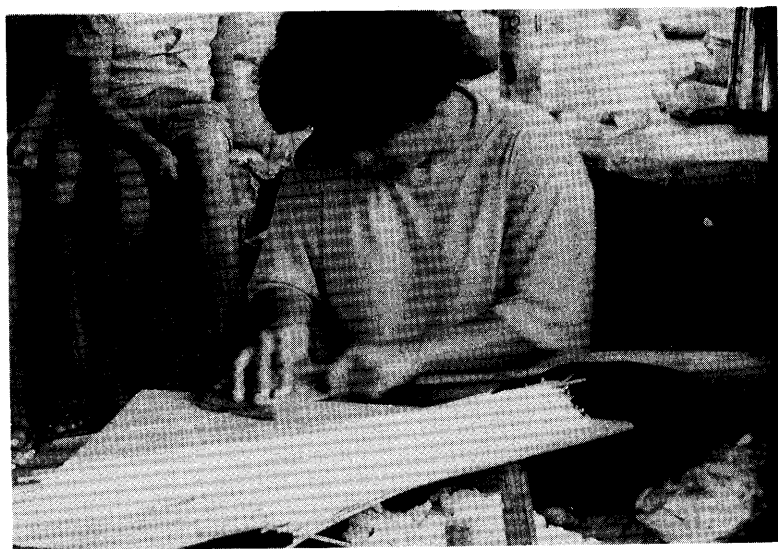
(11) カノムチン作り(3) 夫はカノムチン作りを手伝い、出来上がりをバイクで運ぶ。



(10) カノムチン作り(2) 家の前が仕事場。かまどを使うから大変な暑さだ。



(12) 水門わきの食べ物売り。カノムチンの隣りがお菓子、  
水門向こうでは、果物。



(13) 造花づくり。床下の仕事場で細長い紙を搓って花の蕾をつくる。





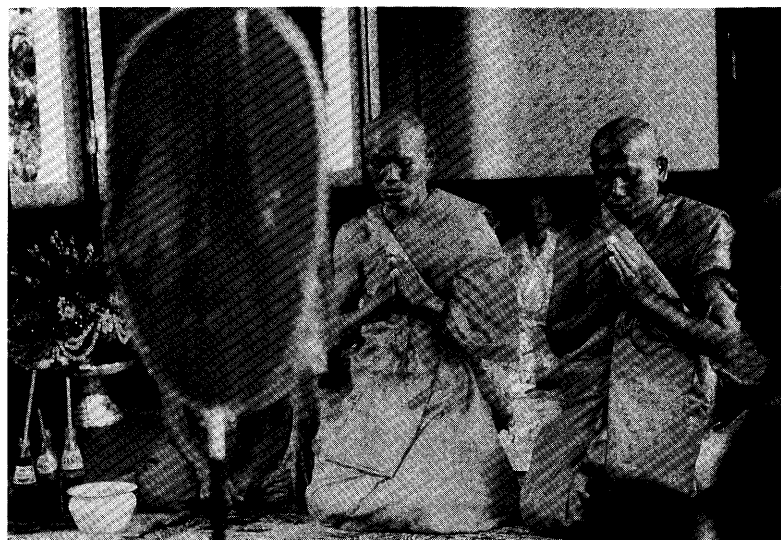
(14) 道路わき露天のソバ屋。バイクで通りかかる人、村の人々がよく利用する。



(15) 老夫婦。子供達は他出し独立した。80近い老夫婦だけが広い家屋で生活。



(16) 得度式(1) ナークの行列は賑やかに、はめをはずしてゆっくり進む。



(17) 得度式(2) 本堂でナークが僧侶に変わり、尊師が生活の心得を説く。



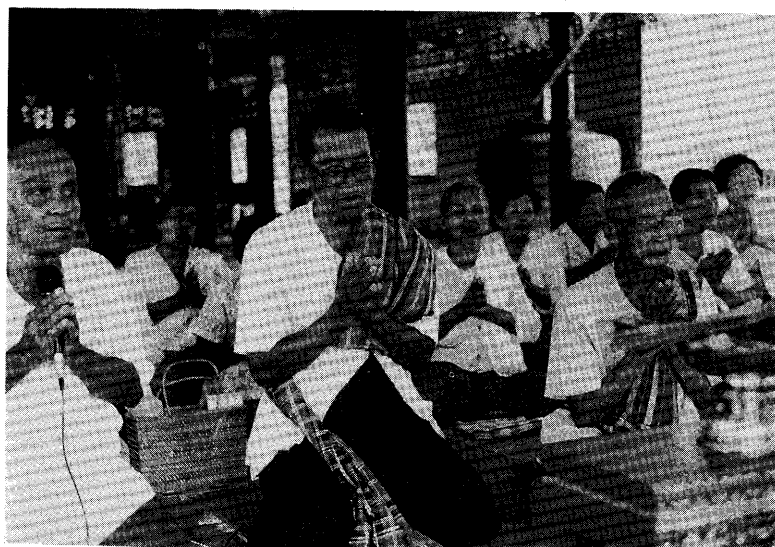
(18) 安居入り(1) 講堂は人で一杯。清楚な身なりで、晴れやかな顔。



(19) 安居入り(2) 住職の掌に灌水して、幸せ多きを願う。



(20) 安居入り(3) 僧侶の余りを皆が頂く。おのずと円座ができあがる。



(21) 安居入り(4) 読経聴聞の前に、仏教に従うことを唱和する。